近代百物語 四

2295

一九〇

仁王物語

四

千五百五十号

本東

近代百物語巻四

勇氣紙くゝ鬼面の火鉢

國家中たにおこゝんときるゝたハかゝるゝ禍祥あり
國家中たに所じんとまゝたいうゝ妖孽あり
いゝゝ俗お表へ長廢ゝもにあるゆゑ今ハむゝ
武田信玄公の門一大井田忠義ゝて万ゆにしよ
ゆゑ士あり上ゝ沼ゝくゝぶれゆて大風紙よのんで狂瀾
と犯し朋友と海でるゝ物どゝめくゝ物ゝくゝ
そゝれゆゝ性屈とつけ邪智強慢一いひゆゑ系
舎もゝくゝ又度ゞ三度三度ゞ一度一度わたてのち

日本圖書

みち途中みてのまいりんも跡形のこりぞかたるる
ふれども中ごろつきれもちれバおのれがあるとい
ふ紙ぞこたつひの男女もいさゝか恋愛の心
おこれ給全てのゝ〳〵命をのれバ我心のまゝ
として知らず暫時役義といひつけ所用も休ずせめ
つひ業たゞそぐも教とさゝめられたゞへバ郷
おさけといふの病ちゞ人の雑義とかへ是ハ儀義
ゑ人のうるまひ是がある夜家僕多くあつたゞ
今俄に玄関にてゝおとの空へ出行のゆんと
うめひ人をバかゝ孫の鬼面の火鉢おのれと社中紙
ゆ形に出へあゝ仏法をとゝ〳〵ひとゝもべふりまちく徒
来ゝ今〳〵ゝ家中をもゝ人へぞいづれも怪さま
ゝねど此ハ是ゝ中ゝ上ゝ紙変じて若ゝれバ出
義ハゝれと空すゝもおど孫くけ〳〵死く火鉢みた三
是ありて人ゝ〳〵ハ一是多〳〵く勅くハゝとゝ
ゆもゝげ〳〵いひくせバ中ゝ火鉢ちゝも勅うぞ
わざひもゝく志づ中ゝとゝものちゝ義豆孫社会中
家僕来りて者ゝおゝ〳〵たゞ今納戸〳〵あれとハゝ
ゝゝ社多の空へ〳〵出へ形て見れども人もゝく多とゝ
ひて為ゝ〳〵ゝ出へ〳〵ゝ業裏のうちゝ多

と費をとるまでもなくあんどしあるいはうちそだてかぬ
ぞやるおすぐくすべて砂糖の壷行燈あるく紙屋坊
あくのぐくとそだてそだとあんあげく罵つりを蚊
蝿の焙ぐぶ〜けひと言上つきまりるとしあつぎあへぞ
ひとは出義いあつひさそくおろうれのぐもるこ
の壷ともにあれは蚊の出るは志ぜんのたれあるたりのが
あるくとそにそたものが言徒らてふ寓ともつあべるれ
めづしうぬるもしいひるるせば壷の蚊姉てび出を
るもすー家僕どもるをあれるはの為にして弁慶
とうぞくいうを俗古今の英勇とるくうれと慈ぜ

が或日忠義出仕のゝち家僕一人ひそかに忠義の出仕の
うちに社家と掾陰にていと明軍どふ吊天井とた
あぐれば土足にてあゝ足ゞ十ゞ六ゝ足人ゝかゝ人
天井にあゝがゝのつくだゞ足ゞ足地あゝざれば此お耳に
入ゝとゝゝくゝゝれば忠義うゝがゝ良ひゝくゝ
うんゞがゝくゝ立ゝにおちざれば家僕とゝゝ足小袋
にゝゝゝ入ゝれゝゝすておくゞゝかゝゝゞ他ゝへゝゝ
すゞゝゞとゝ流ゝいひつけかへゝゝがゝのゝち日紙通て忠
義妻ゝの人ゝ和ゝ月ゝにゝつゝ婢と使ゝゝゝゝいゝ
へいひゝしにおゝ姫ゝ忠義ゝかゝゝかへゝゝとゝれゝとゝる

ゝもふ義とゝ仏せんぶもらげど男女とゝ呼び出し帰
ざ者ゝもらゝ一せ一ゝ士のせんぶもゝく云飛び男女
と誅せ一ゝ信玄の耳に達し平日のふ形武の
ゝもにそひゝ一竜科宗門作せ分させゝれ遁て飛科
あゝ一ゝて一門中へあづけゝれらびく書とつゝゝ
ゝあるゝゝ出義ゝあゝ出ゝが家僕とゝびて出首ハ
行ゝの首ゝんべ飛ゝゝもゝ一せゝ行ゝそゝ飛ゝ
ゝゝ出べ家僕ハおどゝゝゝくゝゝれども首もゝ一遁首
ゝあゝゝもてゝゝゝゝゝゝてゝゝゝゝゝ義ハ大ひゝ
いゝゝゝ人ゝ射ゝて遁首せぬハ心中に一ゝゝあゝと

ゝて一ゝ一せ射ゝゝ書の一門ゝふゝゝゝんゝゝ
ゝ出てゝゝゝゝゝ一ゝ牡丹とおゝ人ゝゝゝゝゝ義
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ書ゝゝゝゝゝ義ゝ猪
ゝゝゝ仮ゝんの蓋ゝゝ飛のゝて真さゝ新行ゝ人ゝ
ゝ猪ゝゝ生首ハのせゝゝゝ日ゝ首もおのゝゝゝ人
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

て見給ひしに死せるにおどろきおのれとあらかじめ
用意しておりひつぎにと當がき給へ〻〻と枕元に
うちまもり眼ぬけ出死したるこれ〻〻ありしやとの
こと信玄さらに思ひ給へまれし匠史の死うづの
捨べしと作せ出されし教代の家ハ没収せられぬ無不仁
と行へばうくれどこれのあやまれるもなかるべしこそ〻〻

怨のあるべきハ屍の火焔

今ハむかし山陸の國宇治のあさかを森死といふ
異嶽といふ傍あるこれ世紀なるし山居に身生死も
じゆくれんん移んん若悪不二とさとりをあきらめ儀れば

一服ときこれ如来に陽まれハ一まのれ水に閑
しあるうにこと人とそでのあるこれ世をあらと傳
ふしあるもと服すて死さあるこれ拾中り表八
夜代四めぢうあ合線表の用さくあること初夜も
すれるやさらべ一ぞくあのこそ祈りへ眼の猪の
きるひとたぢこれ世煙角にのもべうをを表に
人おくして編戸ふりてあげれの聖やとくと仰く
ぞあるこれぢ代ぢ有ること人れまれるた夜陰
におよび来ぢさ人にあれべ火ならけに松うく風
のひぢれをんと拾にれべきりにあひて秋ハ主涵

のものの家ゞ山ゝ田ゝまで人々ゝ乱れ来内外ゝ騒ぎ
とゝぐゝとたのむゆゑ吳嶽おどろかくへそといふ
人々ゝ山新門に入ておせども生ども門先地に伏て拝へ
どもまこと生どとかくさとるおのひいでゝ宗の編戸
をおしあけ門うげゝとゝくゝれべこみゝたるれ吳ゝ人
をゝぐゝ拝でも寄られて泣ゝたるかんだせへ芝蘭
にあめ外をゝぐゝでゝく紙一かゝざる詞のもしく吳嶽
乃ゝ痛りく拝をも出身をいづくれ人いゝ寄るゆゑく
山西へ夜中にまゝひ来るゝと情れあとたゝ少人ハ世
にゝげる新外あげ武身へ俗渡れのの家ゞ人あれ

びとたゝいでくへさゝ色縫彼の浦にゝ乱来ゝまゝ奥孫に吳
ゝされちゝ死にに年にゝぐゝれゝ陸奥のそそにゆゝ
ぐゝうゝ死月にあへべさかとあまゝれるのおを病さに
人月の家田外うゆでひく恵びいでいさゆへゝも方角
ゝてもちゝざれば今山西に来ゝぐゝ父ゞ公ハ若逼十内
ゝゝゝゝ公へ絡ちゝあゝれゝの人出傷としたゝ外新に
おしあつゝ吳嶽へ路彼外字ゝゝさゝ海さうまゝく
ゝ恵へと寄にゝゝひ右ゞくあに滞敵したゝ外
ゝと先古へおゝゝゆゝゝび親父へきへゝゝん仙ゝく
おもゝれゝゝいゝ行んごゝいひゝぐゝれべ絡ちゝへと

あいをさそくおもいあはせ若ゆうけ出怒情をうけ出おとど
行ゆくへてう出もん紙ずべきやうさくをうれしがる
武士のゆゞ人あ死びゝた名ゝさを國ゝう人ゆて朋輩はど
先所人ゆでゝ指さを出ゆんがゝ古ケゝ四人そもの
ゆ代出悪樂ゝ出ゆ子とゆてゆのれとおゆひ入ゝう新を
ゝ吳嶽新森あさゆゝをうゝべを日おりひたゝう悪俗
ゆんちが古國ゝ四死十内度へもたひゆんゝくりくゆゝう妻
堪さをんゆれゆでへ鹿浪ゝ仕りんはかどのつうれも
あゝんゆりをとゝ休見すどゝおくそゝるゆ死出家ゆゝと
ゝ徹ゝゝへ巻明りの三日ゝゝをゝりの一ゝを寸てへ三ゝとゝて

化
拍の
ゆゝ
ゆゝ
ゆゝ

医者のかくさるべかりけん新吳嶽なるひとこゝろにて
養し神意と吳名して又六日もつとめしがある夜吳
嶽沼辺と称て出すぐ出こゝろうろうけて消さも僥
倖せしいうべしけん消さうろあれと一智大ひ喪
ひ居られ夜若もうけ出るすると見れべコハいと家
ろうとも居れぬ狸の面なるあ歯とも出し庶ぢらと
いざ死つき屍と祈づりのら死ろと居ろ死みとび
のもあきれたちなうさもしもと家と引ろ死ろせられば
居ろとハあんとわ遠うて月夜と参死ぬうれもち頭
の痛もとぐるく血と眼ろあばたりとうも揉ろ紙と

元出しおりぬぐへどもあらへべこそうすもあらで血
あされ身ふるも痕てどもやくとちがえ中おりい
ふうおるをうれべうこもいれどもあこ
四向して横ところと痕えうちかつきあら紙めへ
如さりしが痕あけくれべ産安も痕も血ま注一紙
ぬぐひうをこ三日もすだうしま痕更産もうく
称いを正祢とうめひて痕えうと引あげて
毛のをへうを紙ぐいと尻と罪九と紙大ひま撥裂
裏嶽い痕温とんおうをれも尻のいうく山養お
ちしに産すが方ぐく人言しても安へ称べ沢中と痕ま

おしあてうをへて尻れどもいうくいつく味をうぐう
ま痕紙ありしお科とまひうをて尻ちあづうり痕
も大うを食めをべまおもりども称いをたるいへく
まうを尻尻しま松の木れをへうしの三すだうり失ま
ゆうしと尻ま尻めとうしいうく肩ゆとうびのうかて
さをれしめ尻さうれうり失傷の大うをと十信れその
いうく坊をうを尻ま注あうしいの中ちあまも尻せべいう
うるせうてあうんもををどいのちけをてのの山位せと
杖ますぐをてうく痛め尻をぐう痕産と出うをを中付傷
たぬうを紙いうあもせど絡ちうとひしうを尻もあをう

ほうれんあうめーがきねさへ傍ばうこみーへとろ
くをたのがうんうやあもくあるよめごやーうす
人ねんしけるやうう

山の神へ饗ゞ好物

糸及貝塚と人ばかへ海辺みて漁猟の家多ーたん
と人ばかりの饗とうんとて鮮とつうりて魚釣おこた
うみれうゆるとれて農業ときとある釣ゆれて及れた
枝木の切株二又ばうるゞやかにありてやかへやうれ
てあり枝木ハ是へかりあげ魚やあれつうばひてうりあ
る釣ゆさて及るにきさきのれ枝木ありてやかやゞれ

きりつくろひて次の釣及りたまでれどもたんあま
と姉ぎみおりひさ枝木ふさあゞけ釣うてやあうん
次にくべて及んとおりひ饗のうごに入れうてあらううり
て義れ中きさくとをうう　枝木ゝんゞて生釣とうう猿
の男人れ面ひひ人是ひ人ありたちまち言葉発して秋
ゝ山の神ゝを性命とおのりれ中に入やあれそんをる
及ありうれとゆりて秋と出さゞ後日ふうく恩と祐を
べーとゝをたいうくんぢ山の神ゝもあれ秋やかと祝ず
ゆりあーとゝ祝のいろくゝとひび云すれゞ安入を
云うばんぢゞえハ行ゝとゝ及りにをんうくんゞ

いよくちうきうて紙のあるうにまび云とすれくれはう
ぞ又名紙ともあるべきぞ口ぶいうもすべたまう国ぶん
のこと以ぶみあにうう崖出ありうこれとやうなの
の子細もれ〜ねどうこれと山猫といふ人名紙記れば
うくこと亜ふあうぶ紙をもぬて竜とうふといふ物
四ぶ美弦

一名玉天地説　全部又冊

右の書ハ天地の始ねさだうぶ漢くう世の風俗ぶうつと
ぶうう日と今ぶ名ぶくく書のべ山未の世ぶ日ぶてあうくぶ
ぶくう名ぶの世〜とれりうふ本うぶ物く

一日本道中行程細見記　懐中折本　全一冊

西ハ朝鮮釜山海対馬長崎ヨリ東ハ
山陸津軽蝦夷雲前まで〜〜〜〜〜〜
〜〜法と記〜　神社　仏閣名所旧跡宿
軍南〜　船　拭ヨ　まで〜〜〜記〜
た先年ぶ在〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
捕改正仕〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜